

体験交流館ニュース

■第1回しぶき氷観賞会を開催しました

猪苗代の冬の風物詩、「しぶき氷」の観賞会を1月23日(日)、天神浜周辺で開催しました。

講師(現地案内)の鬼多見賢さんに周辺の植物などの説明を受けながら約1kmを歩き、しぶき氷の出来ている場所に到達。当日はあいにくの曇り空でしたが、参加者のほかにも多くのカメラマンや観光客がしぶき氷を見物に訪れていました。

ことは猪苗代湖の水量や積雪が多いため、しぶき氷はやや小さめ。大きいしぶき氷はまだ見られませんでした。参加者らは熱心にしぶき氷を観察し、鬼多見さんの説明に聞き入りました。

※しぶき氷を見学する人に注意

湖との境目の傾斜部分は大変滑りやすくなっています。足をとられて転倒しないよう十分注意してください。また、しっかりと防寒対策をしてお出かけください。



しぶき氷だけでなく、植物などについても説明した鬼多見さん



当日のしぶき氷の様子。積雪の影響などで、まだ小さめです



しぶき氷の説明を受ける参加者の皆さん。防寒着でも寒そうです

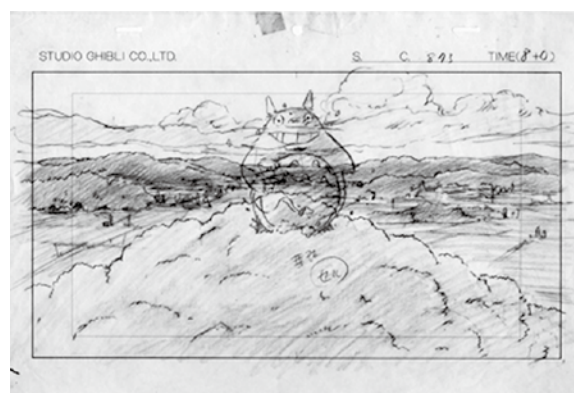
イベント情報

■スタジオジブリ・レイアウト展 ～高畑・宮崎アニメの秘密がわかる～

「となりのトトロ」や「崖の上のポニョ」など数々のスタジオジブリ映画を手がけた高畑勲、宮崎駿両監督の作品の魅力に迫る展覧会です。＜レイアウト＞とは、キャラクターと背景の位置、動き方やカメラワークなどを一枚の紙にまとめた、いわば映画の“設計図”にあたるもの。本展では、両監督らが描いた約1,300点を展示し、アニメーション映画をリードするスタジオジブリの世界をご紹介します。

- 期間：2月26日(土)～5月22日(日)
- 会場：福島県立美術館
- 休館日：毎週月曜日(※3月21日、5月2日は閉館)
- 観覧料：一般・大学生 1,200円(1,000円) / 中・高校生 900円(700円) / 小学生 600円(400円)
- ※()内は前売券と20人以上の団体料金

- 前売券販売期間：2月25日(金)まで
- 前売券販売所：チケットぴあ(Pコード：764-441)、ローソンチケット(Lコード：21000)、福島民友新聞社、支社支局ほか
- ホームページ：http://www.minyu-net.com/



「となりのトトロ」©1988 二馬力・GNDHDDT

猪苗代町ふるさと歴史館からのお知らせ

■国指定史跡会津藩主松平家墓所「土津神社」と周辺の史跡を伝えるコーナー設置

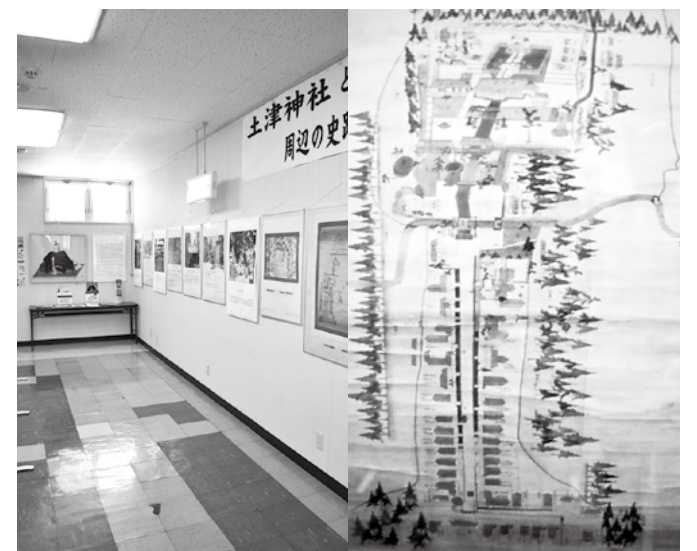
昔から地元で「土津様(はにつつあま)」と呼ばれ親しまれてきた国指定史跡会津藩主松平家墓所「土津神社」は、初代藩主保科正之公が祀られている場所です。

現在町では、16年に発足した「名君『保科正之公』の大河ドラマを作る会」に参加し、関連地域との交流や講演会などさまざまな活動を展開しています。

町ふるさと歴史館でも、国指定史跡会津藩主松平家墓所「土津神社」と周辺の史跡を伝えるコーナーを設置し、資料や関連図書の紹介を通じて、「保科正之公生誕400年記念事業」を応援しています。

この機会に、ぜひ猪苗代の歴史に触れてみてください。

- 期間：3月31日(木)まで 午前9時～午後5時
- 会場：町ふるさと歴史館 2階
- 内容：土津神社と周辺の史跡の資料と関連図書
- 協力：猪苗代地方史研究会、いなわしろ伝保人会、猪苗代の偉人を考える会



展示コーナーの様子(左)と土津神社周辺地図(右)

■第8回すくすくファミリーを開催

第8回すくすくファミリーは12月6日、町ふるさと歴史館研修室で開催されました。今回の内容は、「親子でフラダンス」。

参加した15組の親子は、レイやスカートを身に付けて、すっかりハワイアンムード。講師の遠藤富己さん(郡山市在住)の指導の下、「プープーヒヌヒヌ」という曲に合わせて、楽しくフラダンスを学びました。

※プープーヒヌヒヌは、ハワイ音楽の権威マヒ・ビーマーの祖母で大作曲家のヘレン・デシェイ・ビーマーの作品。ハワイの子どもたちが最初に覚える歌と言われている有名な子守唄です。ちなみにプープーは「貝」、ヒヌヒヌは「輝く」という意味です。



レイやスカートを身に付け、フラダンスに挑戦

教育委員会コラム

～第十回～

年度が変わると、小学校では新学習指導要領が全面实施となる。目玉はいくつかあるが、その一つが「5から6年生の外国語学習必修化」である。背景には、言うまでもなく国際化の進展がある。

国家の中枢を形成する民族が話す言葉を「国語(母国語などという場合もある)」という。日本のように、国語が一つだけの国が複数存在し、しかもその数が拮抗していると、国語問題がしばしば民族紛争を引き起こすほどやっかいである。そういう場合、複数の国語はそのまま、共通に用いる「公用語」を法律で決めるが、その公用語でさえ一つだけとは限らない。

インドでは、国語(母国語)はヒンズー語、ベンガル語、ウルドゥー語、カシミール語など何百もあって、連邦公用語と連邦公用語にヒンズー語と英語を定めている。さらに州毎の公用語があり、公用語だけでも20以上にもなる。これほど極端な例はそう多くはないが、複数の国語、公用語を話せるのは国際社会の常識で、母国語のほかに最低2カ国語くらいはできないと生きてはいけない。

日本のように日本語一つだけという国は、極めて珍しい(珍しかったと言うべきかも知れない)。これからさらに国際化が進む社会の中では、母国語のほかに最低外国語を一つ、すなわち世界共通語と言われる「英語」を習得することが欠かせない。

(土屋)